

親鸞の生涯 42

六十二歳のころ（1235）、「二十年における関東教化を終えて故郷京都に帰ってきた親鸞は、師匠法然さまから教えられた「選択本願念佛」のおしえを『顕淨土真実教行証文類』という著作にまとめ上げることであった。その矢先の善鸞事件！。その悲惨なできごとはしかし親鸞に新しい天地への開眼をもたらせた。

虚飾を脱した本然の自己を観た。親鸞はこう語る。「浄土真宗に帰すれども、眞実の心はあれがたし、虚仮不実のわがみにて、清淨の心もさらになし、是非しらず邪正もわかぬ、この身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり（正像末和讃）」

「人の師（教導者）」であつた過去から脱却した親鸞は、その「今」の境位からあらためて法然様はじめ祖師・先輩たちの教えを、味わいなおしてみなければならなかつた。そこで仏教の全体を見直し整理してみる。

『愚禿鈔』二巻：「賢者ノ信ヲ聞キテ、愚禿ノ心ヲ顕ス」。賢者すなわち法然様の信心と愚かな親鸞の心を対比するなかであらためて仏教の全体を見直し整理してみる。

『西方指南抄』（上下本末四巻）（法然伝の資料としては最初のもの）法然の書簡・行状・語録など二十七ヶ条を集めた。

釈迦一代の仏教を、末法濁世に生きる凡愚といふ境立から本惑理解し、この私のために

選択された念佛という法の眞実に目を開けようと教えてくださった法然さまのご恩を、そのご事績・書簡・法語・伝承のなかから偲ばせていただこうと編纂した。

もちろん法然さまは今は亡い。亡くなつた今も、朝廷や旧仏教からの弾圧で、その墓さえ著作の版木さえ破棄されている。同門の弟子はすでに四散し、京都には法然さまの教えの影さえ残されていない。今や、親鸞わたしが語りつながなければ…という危機感からこの作業であった。

もちろん法然さまは今は亡い。亡くなつたとそこに顕著な特徴を見ることが出来る。

①もちろん関東の念佛集団の指導者への応答書簡は数多く伝えられてはいるが。これらの類は自身門流の権威づけのために門流のなかに大切に（時には改ざんして）伝持されたもので『ご消息集』『末灯鈔』としてまとめられている。

②「いなかの人々の、文字のこころもしさず、あさましき愚痴きわまりなき（ひとびとのために）やすく心得せんとて、同じことを行ふように、文字さえその意味さえ読み取れない無教養なひと。愚痴きわまりない生活のなかにいるひとと共に。阿弥陀さまの念佛は聖人・賢人のためではなく「凡夫」のためと法然さまはおっしゃつた。「凡夫と言うは無明煩惱我らが身に満ちみちて、欲も多く、怒り腹立ち、そねみ、ねたむこころ多く暇なくくらしている「石・瓦・つぶてのこと」きくらなり」「わたし親鸞の仲間」であると親鸞がいう「御同朋・御同行」がその話し相手であった。

その他、先輩にあたる隆寛律师や聖覺法印の著書に、親鸞自身の了解(りょうげ)を加えたもの『唯信鈔文意』・『一念多念文意』など。そのおおくは、いわゆる〈和語聖教〉とよばれる、「ひらがな文」で、親鸞はここに漢文世界から離れ〈和文世界〉に入ったことを示す。

それは一体親鸞の生涯においてどういう転換なのか。

十方無量の諸仏は
百重千重圓繞(いにまう)して
よろこびまもりたまふなれど
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ミ 和讃

五
月
舉
月
き
み
の
こ
よ
み

日	日	日	日	日	日	日
宮嶋一子さま三回忌法事	永井誠一氏宅法事	永井均氏宅法事	朗読ボランティア（録音）	基幹運動推進委員会	母の日	出石組念仏奉仕団
日	日	日	日	日	日	日
谷垣なつ子氏宅法事						
日→一八日						

一八日	出石組合会奉仕団 加古川市仏婦様来寺
一九日	読み聞かせボランティア
二十二日	宝小丑降誕会
二十三日	玉井 啓介さま一周忌法事
二十五日	連研役員会
二十六日	みのりを聞く会
二十七日	朗読ボランティア（編集）
二十九日→三十日	本山參拜納骨研修旅行

した親鸞は、その「今」の境位からあらためて法然様はじめ祖師・先輩たちの教えを、味わいなおしてみなければならなかつた。

② いなかの人々の、文字のところもしら
ず、あさましき愚痴きわまりなき（ひとびと
のために）やすく心得せんとて、同じこと
をとりかえしとりかえし書き付けたり」と言
うように、文字さえその意味さえ読み取れな
い無教養なひと。愚痴きわまりない生活のな
かにいるひとつと共に。阿弥陀さまの念佛は聖
人・賢人のためではなく「凡夫」のためと法
然さまはおっしゃつた。「凡夫と言うは無明

「愚禿鈔」二卷… 賢者ノ信ヲ聞キテ
禿ノ心ヲ頭ス。賢者すなわち法然様の信心
と愚かな親鸞の心を対比するなかであらため
て仏教の全体を見直し整理してみる。

り腹立ち、そねみ、ねたむこころ多く暇なく
くらしている「石・瓦・つぶてのこと」き
「我らなり」（わたし親鸞の仲間）であると
親鸞がいふ「御同朋・御同行」がその話し相
手であった。

親鸞は晩年、多く、その人達と対話した。
そして、その人たちの生活感覚のなかで「お
念佛」を一緒に唱えて歓喜讚仰しあつた。

十字の名号（帰命尽十方無碍光如来）や、八字の名号（南無不可思議光仏）を多く書き与えて念佛称名をすすめ、また『和讃』を教説

生歌いつづけ、文字も読めない人々と朗唱しあつた。ことに、「現世利益和讃」十五首をつくつて老若へだてなく共に民衆感覚のなかで唱和したのであつた。

南無阿弥陀仏をとなふれば
十方無量の諸仏は
百重千重圍繞(ひょう)して
よるこびまもりたまふなむ
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「和讃」

超世の悲願 聞きしより
われらは生死の 凡夫かわ
有漏(うる)の穢身(えいしん)はかわらねど
こころは淨土に あそぶなり
このご和讃は帖外和讃といつて、親鸞さま
八十五歳までに折々につくり、みずから三帖
和讃として編集なさつたその後、おそらく最
晩年(ご臨終九十歳)間際間に、こころに
つぶやかれた九首の和讃、と伝えられている
うちの一首です。

私たちの依怙地な判断や浅はかな思いを運
かに越えた如来さまの悲願(凡夫悪人をこそ
救おうという切ない願)。その本願他力のお
呼び声「念佛」が聞こえたとき、その一念。
このわたしは依然として生死に執着し日々を
迷い煩う凡夫から逃れられないで、煩惱だら
け泥だらけの穢れたこの身この現実であるは
れども、今生この身のままで必ずお淨土へ迎
えとられる身にしていただけるとは。
親鸞さまのご遺言とつたえられるのは
「それがし閉眼(眼が絶えたら)せば、加茂
(川)にいれて、魚に与(あた)うべし」
それと並んで親鸞さまの遺言とわたしはい
ただきます。

「里の母からならつたうたです」
前坊守は日々このご和讃を口ずさんでおりま
した。亡くなるその時まで。

出会いと別れ

昨年末からこの春にかけて、お葬式と結婚式に頻繁に出会いました。「人生は出会いと別れ」とは聞いていたもののこの短期間にその現実を見せつけられて、わたしなりにショック。

しかし自らの覚悟はまだ見いだせない中、そこから学んだことを一応こころでまとめておきたいと思います。複雑微妙な事実を簡単に記述してしまうには多大な躊躇を感じますが、類型的な記述になることを恐れないのでまとめておきたいと思います。(ここでは結婚式の幾つかの祝辞を分析してみました)

☆「結婚」。ある男性と特定の女性との出会いとみる結婚観。一般社会の常識的結婚観。「はやくいい子どもをつくって幸せな家庭を築いてください」。互いの性が枯れるまで。枯れてしまったら離婚の可能性が忍び寄つて来はしないか。

最後に
☆親鸞さまの結婚観
二十年間の比叡での求道修業に限界を感じた範円。二十九歳にして山をおり、京都六角堂に参籠して救世觀世音菩薩に祈願したその九十五日目の夢告。(伝記ではこの夢告が親鸞の人生にどう連なつて行くのか明確さを欠くが)、しかし「本願他力」や具体的には「結婚」への開眼・契機となつたことは確かであろう。

行者、宿報ニヨリ設(タトイ)女犯ストモ
ワレハ玉ノ女トナリテ身ヲ捧ゲン
一生ノアイダ能(ヨ)ク莊嚴(ショウゴン)
シテ
終ワリニ臨ンデハ引キ導イテ極樂ニ生ゼシメ
この夢の告げのなかの一いつのことに着目した
い。
「宿報」(しくぼう)。宿世からの業報。
過去からの因縁ということで。お釈迦様のおさとりの内容。「法」「縁起的道理」。
無量のご縁(条件)によってものは成り立
そいる。特定の固定的なものや事柄で存在するものはない。(「無我」の思想)。さしつ
め結婚とか出会いについてかんがえるとき、
そこに無量の条件「おかげさま」を観ましょ
う。あだやおろそかな出会いではないのです
わたくしにはとても考えおよばないような無
量百千の影響力のなかの今の出会いであるこ
とに思いを致しましょう。
「縁起を見るものは法を観る。法を見るも

のは縁起を見る」

この出会い、この存在の背景に、もつたり
ない無量の「おかげさま」を見てくらしまし
う。それが仏教徒の人生観です。

次ぎは「莊嚴」(ショウゴン)。

漢音ではソウゴン。吳音はショウゴン。

蓮如様は「衆生をしつらひたもう」。「衆生

の心をそのままおきて…よく召され候」とい
う。悪人を善人に「したて上げて」救うこと

ではない。煩惱の悪人をそのままの姿でほと
けにしようと働きかけてくださる如来のはた

らきを「如來慈悲の莊嚴」「本願莊嚴のはた
らき」をいうと教えてくださいます。

いま結婚した二人。一生の間。波風あるか

もしれないが、しかしまることそのまま如來

の本願にねがわれながらの一生であることを

おもうにつけても、夫と妻とも互いに玉の妻

玉の夫と拌みあいながら過ごし、臨終には

「おねんぶつ」のなかで共に「ほとけのくに

こんな祝辞を聞かせていただきました。

勝林寺 納骨研修旅行

ご案内

京都西本願寺 グランド花月お笑いの旅

行程

5月29日

勝林寺(6:00頃)→京都・西本願寺に参拝(9:30)
→西大谷本廟で納骨、参拝(10:20)
→アサヒビール吹田工場見学→なんばグランド花月→大阪南(泊)

5月30日

お宿→南大门→東大寺→平安遷都1300年祭
→吹田JCT→春日JCT→和田山
→(19:00頃) 勝林寺へ帰ります

29 [土]	① 9:45 ② 12:45 ③ 15:45 ④ 特別興行
開場	
中田カウス・ボタン 西川のりあ・上方よしお 桂きん枝大喜利 まるむし商店/他	
園石田崎	
内場勝剛/池乃めだか 末成由美/Mr.オクレ 水玉れっぷう隊/渡辺直美/他	

お申し込み先:

仮説評議委員まで

締切り

5月8日(金)

